

# 日本光学会 2013 (平成 25) 年度年次報告

## 1. 総 括

日本光学会前幹事長 渡辺 正信



2013 年度を概観すると、例年の行事に加えてのおもな事柄は下記のとおりであった。(1) 将来問題検討委員会から、新法人の設立と現在の主たる日本光学会活動の移行の構想が出され、幹事会での議論・議決により、その方向で進めるべく会員投票にかけることとなった。(2) 欧州

光学会 (EOS: European Optical Society) と応用物理学会との間で相互協定 (MOU: memory of understanding) が締結された。本会が 2011 年度より準備を進めてきたものである。これにより、欧州光学会会員と同じ条件のもとに、同会講演会における講演が可能となった。(3) 広告料や会費収入等の減少による赤字増大の傾向が強まってきたため、広告募集等委託先の見直し、次年度行事予算の圧縮等を行った。(4) 光学会創立 60 周年 (2012 年 4 月) に向けた各種記念行事のうち、一部残っていたホームページリニューアルを終え、当該行事を完了した。

日本光学会の会員数は 2014 年 4 月末時点で、正会員 (B 会員) 781 名、準会員 (A 会員) 647 名、特別会員 106 機関、賛助会員 60 機関であり、長引く景気低迷の影響もあり、昨年度に続き微減の状態が継続している。2012 年度終盤からの政府の積極的な景気浮揚策もあり、わが国の景気は緩やかな上向き傾向が続いているが、この傾向が定着して進むよう、本会としても一定の貢献をするとともに会員の増加につなげていきたいものである。以下、2013 年度の活動を振り返る。

まずおもな研究集会について記す。日本光学会の第 22 回年次大会 Optics & Photonics Japan (OPJ) 2013 が奈良市の奈良県新公会堂において、2013 年 11 月 12 日から 14 日までの 3 日間開催された。講演件数 303 件、参加者数 562 名と、東京開催の前年よりも増加した。基調講演および海外学会からの特別講演によりプレナリーセッションを構成した。東京大学の香取秀俊教授より「時空のゆがみを見る光格子時計」と題した基調講演が行われ、サイエンスだけでなく、夢のある応用を視野に入れた研究の紹介がなされ

た。また、応用物理学会と MOU を交わしている海外機関である OSA および SPIE からの特別講演を頂いた。OSA の理事である Byoung Yoon Kim 教授 (KAIST) が “Few-mode fiber devices and their applications” のタイトルで、SPIE 会長の William H. Arnold 氏 (ASML US Inc.) が “Semiconductor lithography from 1000 to 10 nm” のタイトルで講演された。一般講演のほかに、4 つのシンポジウム (日韓生体医用工学、光空間多重通信における光技術の活用を考える、光共鳴トラッピングと物質マニピュレーション、光干渉 3 次元センシング技術の展開、チュートリアル「微小の玉手箱」) を実施した。会期中に日本光学会奨励賞、光設計賞の授賞式と記念講演を行った。詳細については、OPJ 2013 の菊田実行委員長による報告を参照されたい。

第 38 回光学シンポジウムを 6 月 27 日から 28 日にわたり東京大学生産技術研究所で開催した。今回も「光学システム・光学素子の設計、製作、評価を中心として」とのテーマで、招待講演 8 件、一般講演 18 件の発表があり、参加者は 276 名であった。このほかにも各研究グループや各地区の主催による多くの研究会が開催されている。また、光学分野の特定のテーマについて系統だった知識習得の機会を提供する目的で、例年冬期講習会を開催している。今回は第 40 回を迎え、1 月 16 日と 17 日に東京大学本郷キャンパスで「光ファイバ技術の最前線—基礎から応用まで—」のテーマで実施し、9 件の講演と 53 名の参加者があった。

出版関係では、和文学術誌「光学」を毎月刊行、欧文誌 Optical Review を隔月刊行している。詳細については川田善正「光学」前編集委員長と中楯末三 Optical Review 編集委員長による報告を参照されたい。

日本光学会は光学の分野の将来を担う若手研究者を対象にいくつかの賞を授与している。2013 年度の光学論文賞の受賞者は佐藤琢哉氏 (東京大学) と久武信太郎氏 (大阪大学) の 2 名で、授賞式は応用物理学会春季学術講演会の会期中の 3 月 18 日に、日本光学会 2013 年度総会の会場で行った。日本光学会奨励賞の受賞者は、加藤聖子氏 (シチズンホールディングス) と田原樹氏 (関西大学) の 2 名で、授賞式は 10 月 23 日に OPJ 2013 の会場で行った。また、OPJ ベストプレゼンテーション (OPJBP) 賞は、坂本盛嗣氏 (北海道大学)、高橋里枝氏 (埼玉大学)、橋谷田俊氏 (総合研究大学院大学) の 4 名であった。光みらい若手

奨励金（コニカミノルタ科学技術振興財団賞）には、若山俊隆氏（埼玉医科大学）が採択された。

高野榮一光科学基金が2011年度に設立されたが、その活用のための委員会が2012年度に武田元幹事長を委員長として発足し、さまざまな活動の補助を続けている。詳細は同委員長による報告を参照されたい。

日本光学会には現在14の研究グループがあり、日常的な研究活動や研究会のほかに、国際会議を企画運営するなど活発な活動を行っており、日本光学会の活力の源となっている。

以上に述べたように、日本光学会は光学関連の研究と技術開発にかかわるほぼすべての分野で、会員相互の交流と情報交換の場としての役割を果たしてきた。本会の運営にご協力いただいている幹事の皆様、事務局の皆様、各委員会の委員の皆様に心より御礼申し上げます。

## 2. 編 集

### 「光 学」

前編集委員長 川田 善正

#### 2.1 はじめに

会誌「光学」は、日本光学会が独自に企画・編集し、応用物理学会から毎月発行する機関誌である。光学界のさまざまなトピックスを取り上げ、4号を除く毎号で特集を企画し、「総合報告」「解説」「最近の技術から」の枠組みで依頼記事を掲載するとともに、原著論文、学会からのお知らせ、文献抄録、書評、寄稿などを掲載しており、日本光学会の活動の核となるメディアとして機能している。「光学」の中でも特集企画は、日本光学会会員および光学界の興味や関心と活動動向を反映させるとともに、今後の研究活動をリードする役割も含めた企画を心がけており、編集委員会で最も注力している内容である。

特に昨年度は、「日本光学会60周年記念事業」の一環として、「光学」の全巻をウェブ上に公開し、個人会員がすべてのページを閲覧できるようにした。1972年の創刊号（第1巻）から最新号まですべての「光学」にアクセスすることが可能である。

以下、2013年における「光学」の編集状況を整理する。

#### 2.2 発行状況

2013年は第42巻第1号から第12号まで、総ページ数が639ページであった。過去5年間の経緯をみると、726（08年）、636（09年）、666（11年）、710（11年）、644（12年）であり、2012年と同程度の状況を維持している。会員減

少、原著論文の投稿数減少等の厳しい状況の中で、今後も月刊誌としての形態を維持していくには、より魅力ある雑誌としての企画、編集が必要であることはもちろんのこと、日本光学会として賛助会員も含めた実質的な会員増への取り組みが不可欠と考える。また昨年度実施したウェブ公開など会員のニーズに合わせた取り組みも充実させる必要がある。月平均のページ数は約53ページ、編集委員の旅費等も含めた経費は月平均134万円弱であった。ちなみに2012年は、月平均のページ数が54ページ、経費が137万円であり、出版経費削減の工夫が成果を上げたと考えている。これは質を落とさずにコストを意識した編集業務を積極的に心がけた編集委員会と編集局の自助努力に依るところが大きい。

掲載記事に目を向けると、巻頭言は12編、特集企画の総合報告が8編、解説43編、最近の技術からが7編であった。4号では、2012年の日本光学会の研究動向をまとめ、今後の研究の方向性について議論した。この4号を含む特集題目は次の通りである。光学分野の注目すべきさまざまなトピックスを取り上げ、その分野で活躍される方々に執筆を依頼した。

- 1号 光と磁気—最近の展開—
- 2号 原子間力顕微鏡を支える先端光学技術
- 3号 固体照明の普及に寄与する光学の展開
- 4号 2012年日本光学会の研究動向
- 5号 通信網の進展を支える光スイッチ技術
- 6号 X線顕微鏡の今と未来
- 7号 デジタルカメラの進展を支える光技術
- 8号 新しい価値創出に向かう実時間画像システム
- 9号 ファイバーレーザー研究の最前線
- 10号 光の量子性を利用した計測限界の打破
- 11号 レーザーイオン化法による質量分析技術の進展
- 12号 光渦・偏光渦が生み出す新応用

4号では「2012年日本光学会の研究動向」を各分野において中心的に活躍しておられる研究者に研究動向および方向性を概説いただいた。原著論文は年間を通して6編が掲載された。過去5年の9編（08年）、4編（09年）、5編（10年）、9編（11年）、4編（12年）をみると、減少傾向にあり、投稿論文数の増加は光学会が取り組むべき課題のひとつであろう。これ以外の記事として、「光の広場」のコーナーがあり、「さろん」が2編、書評が6編、さらに光科学及び光技術調査委員会が担当する「光学工房」「Web Watcher」「気になる論文コーナー」等のほか、「日本光学会 news」が例年通り掲載されている。

## 2.3 編集活動

編集委員会の委員総数は31名で、昨年より1名増員した。関東と関西の光科学及び光技術調査委員会委員長も編集委員としてこの中に含まれている。編集委員会は奇数月の隔月開催で、例年通り6回開催した。年間での委員の出席延べ人数は138名で1回当たり23名である。会議時間は4時間であり、途中10分程の休憩を挟むが毎回終了時間ぎりぎりまで熱心な議論が繰り広げられた。特集企画の審議形態は従来どおりであり、1回に2号分の1次構想、2次構想、企画決定の検討を行うため、毎回計6号分の企画内容を審議している。この審議に会議時間のおよそ8割が割かれる。審議の円滑化を目指し、会議開催前には1次構想提出予定の草案を委員全体に配信し、メールによる事前検討も行った。このほか、書評小委員会の進捗状況、原著論文の投稿・審査状況、発刊後の反省、企画決定後の進捗状況、掲載順や閲読者の決定、会計、幹事会等の報告などを定例事項として扱っている。

出版経費については、経費削減の努力がなされ、編集局における用紙の変更、レイアウトの工夫、郵送業者や印刷部数の見直しなど種々の努力がなされ、結果的には予算額の73%程度の支出に抑えることができた。例年に比べて執行率が低い理由は、光学の電子化に対して予算が多めに計上されていたためである。2013年度は予算額に対して支出を大幅に抑えることができたが、会誌としての質を維持する必要性や、経費が原著論文の掲載数やカラーページ数により変動することから、過度な経費削減・業務効率化は難しいものとする。この課題に対し、編集委員会として常に魅力ある特集企画を模索することはもとより、日本語であることの意義、利用価値を見直し、会員諸氏に「読んでもらえる」「活用してもらえる」会誌を目指すことが何よりも重要と認識している。原著論文数の増加も課題のひとつである。和文原著論文のあり方、活用の仕方を光学会全体でご議論願いたいと考えている。

日本光学会のホームページのリニューアルに向けて、「光学」のページの構成も整理した。内容をわかりやすく表示するとともに、個人会員に対して光学の記事をすべてウェブ上で公開した。巻頭言、原著論文などはより多くの読者に見ていただきたい内容として非会員の方にも一般公開し、特集記事などは個人会員限定で公開することとした。個人会員限定のページにはパスワードを付けて非会員の閲覧を制限し、個人会員は会誌全体をウェブ上で閲覧できる形にした。情報の漏洩を防ぐため、パスワードは定期的に変更する予定である。公開当初は、最新号から過去数年分のみの公開であったが、昨年度中にすべてのデータを整理し、創刊号から最新号まですべての「光学」を公開し、個人会員がアクセスできる体制を整えた。

## 2.4 おわりに

以上、2013年度の「光学」編集について報告した。最後に編集業務を担当いただいている編集局ならびに編集委員の皆様、また、光学の編集にご理解、ご支援をいただいている幹事長をはじめ、幹事・事務局・応用物理学会分科会担当の皆様にご心より感謝申し上げますとともに、引き続きご協力を賜りたい。

### 「Optical Review」

編集委員長 中楯 末三

2013年にOptical Review (OR) に投稿された一般論文の統計を表1に示した。合計は176編で、昨年より74%増加しているが、そのほとんどは中国からで73編(486%)増加している。その投稿占有率が50%となっている。一方、昨年43%あった日本の投稿占有率は約20%となっており、投稿数が8編減少(-19%)している。日本以外では韓国から2編減少(-20%)しているが、台湾(+3編、+42%)およびマレーシア(+4編、+50%)からはそれ

表1 2013年の1年間にOptical Reviewに投稿された一般論文の統計。

	投稿数	占有率	審査終了数	審査終了率	採択数	採択率
日本	35	19.9%	33	94.3%	22	66.7%
中国	88	50.0%	71	80.7%	31	43.7%
マレーシア	12	6.8%	12	100.0%	0	0.0%
台湾	10	5.7%	10	100.0%	5	50.0%
中近東・アフリカ	10	5.7%	8	80.0%	3	37.5%
韓国	8	4.5%	5	62.5%	1	20.0%
中南米	3	1.7%	2	66.7%	1	50.0%
欧州	5	2.8%	4	80.0%	3	75.0%
アジア(その他)	4	2.3%	3	75.0%	1	33.3%
北米	1	0.6%	1	100.0%	0	0.0%
計または平均	176	100.0%	149	84.7%	67	45.0%

表2 ODF 12の特集号の論文統計.

	投稿数	投稿占有率	掲載数	採択率
台湾	25	47.2%	15	60.0%
ロシア	8	15.1%	3	37.5%
日本	7	13.2%	6	85.7%
中国	4	7.5%	2	50.0%
韓国	4	7.5%	4	100.0%
フランス	2	3.8%	1	50.0%
アメリカ	1	1.9%	1	100.0%
ブルガリア	1	1.9%	1	100.0%
オランダ	1	1.9%	0	0.0%
計および平均	53	100.0%	33	62.3%

ぞれ増加している。その他の地域からの投稿は表1の通りであり、中近東・アフリカ地域ではアルジェリア(1)、サウジアラビア(1)、イラン(1)、エジプト(2)、イラク(2)、クウェート(1)(注:括弧内投稿数)などとなっている。中南米ではメキシコ(2)のみからの投稿であり、欧州からはフィンランド(1)、ウクライナ(1)、スペイン(1)、フランス(1)、ロシア(1)などである。北米ではカナダ(1)からのみとなっていて、相変わらず欧米圏からの投稿は少ない。その他アジアではシンガポール(1)、パキスタン(1)、タイ(1)からであり、以上世界20か国から投稿があり、国数としては昨年より18%増加している。以上のように昨年は中国からの投稿数が大幅に増加したが、一方で日本国内からの投稿数の減少が顕著になった。

次に、2013年の1年間に投稿された論文のうち2014年5月11日時点で審査終了しているものの数を表1に示し、それを審査終了率としてその右列に示した。平均では約85%となり、約1年半の期間に平均85%の論文の審査が終了していることを示している。さらに、審査が終了した

論文のうち採択が決まった数を国別に表1に示し、審査終了数との割り算から採択率としてその右列に示した。平均の採択率は45%であり、欧州からの採択率が75%と最も高いのは招待論文の寄与が大きいためである。中国からの論文の採択率がほぼ平均程度であり、マレーシアの採択率は0%となっている。マレーシアからの論文のほとんどが光通信に関するものである。

一般論文のほかに Optical Design and Fabrication Conference 2012 (ODF 12) の国際会議の特集号が出されており、一般論文との比較のためその統計量を表2に示した。会議はロシアで開催されたが台湾からの投稿が約半数を占め、この分野での台湾の寄与が大きいためである。日本は約13%を占めているが、日本も含め今後はさらに中近東・アフリカ・欧米などからの投稿が増加していくことを期待したい。さらに、その採択率を表2に示したが、平均62%と上記の一般論文の採択率よりかなり高いことがわかる。この意味でも特集号を組むことに大きな意義があると思われる。なお、ODF 12の特集号の編集長をされた宇都宮大学/キヤノン(株)の荒木敬介先生に感謝したい。

2013年にはVol. 20としてNo. 1~6までが隔月出版され、そのうちRegular Paperが51編、Letterが2編、招待論文が2編であった。招待論文としてはNo. 5にロシアから光学設計に関するもの、およびNo. 6には日本から天体観測用の干渉計に関する論文を収録した。招待論文としては高野榮一光科学基金の援助を得て投稿料無料として多くの論文を招待しているが、なかなか脱稿まで至らず、招待論文数が増えていかない原因となっている。

さて、ORがどの程度読まれているかを見るためには、外販をお願いしているSpringerのダウンロード(DL)数

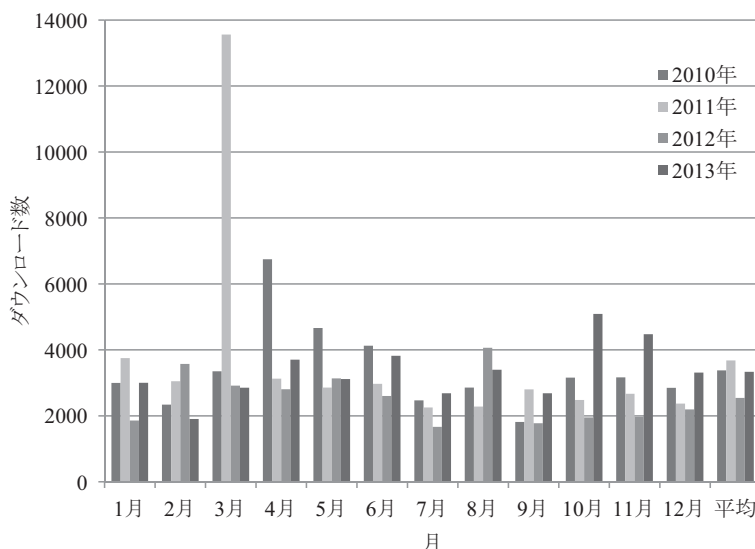


図1 Optical Review の Springer からの月別ダウンロード数.

が参考になる。図1には2010～2013年までの月別DL数を示した。2011年3月にはある論文がある機関から集中的にDLされており、それが全体のDL数を押し上げている。平均的には、約3,200件/月となっている。また年別のDL数は40,542(2010年)、44,166(2011年)、30,523(2012年)、40,026(2013年)となっており、2012年に一度低下したが2013年には再び40,000件/年にまで回復している。平均的には38,800件/年である。一方、どの程度引用されているかを見るためには、やはりインパクトファクター(IF)が参考になる。Springerから報告されているIF値は0.529(2009年)、0.55(2010年)、0.661(2011年)、0.702(2012年)とコンスタントに上昇してきており、今後さらに上げていってIF値1.0が目標となる。

今後ORをどのようにしていくかは、植田前編集委員長(「光学」第42巻第7号p.370)にあるようにOpen Access(OA)化が議論の対象になると思われるが、Springerの冊子体販売も落ちてきており、新学会設立の議論とも絡み今後出版委員会などを通じて議論していくことになると思われる。そのほかの課題としては、審査期間の短縮(編集委員の増員および読者確保)、論文受理と投稿費用の支払いとの関係、カラーページの載録方法の検討、日本語論文の英文再録など多くの課題が残っている。特に最近目立ってきているのは、日本国内からの投稿が減少してきていることである。

ORは日本光学会のひとつの柱をなす事業であり、光学会会員の望む雑誌になるよう努力してゆくので、今後も会員諸氏のご協力をぜひにお願いしたい。

### 3. Optics & Photonics Japan 2013 (日本光学会年次学術講演会)

OPJ 2013 実行委員長 菊田 久雄

日本光学会年次学術講演会である Optics & Photonics Japan 2013 は第22回目を迎え、2013年11月12日～14日の3日間にわたり、奈良県奈良市の「奈良県新公会堂」にて開催された。奈良県新公会堂は奈良公園の中にあり、東大寺や春日大社に近く、国際会議などにも多く使用されている。能楽ホールをメインホールとして、5会場で口頭発表を行うとともに、レセプションホールでポスター発表および企業展示会を行った。252件の一般講演、8件のポストデッドラインペーパーのほか、4つのシンポジウム(日韓生体医用工学、光空間多重通信における光技術の活用を考える、光共鳴トラッピングと物質マニピュレーション、非干渉3次元センシング技術の展開、チュートリアル「微

表3 OPJ 2013 の講演件数。

	口 頭	ポスター	計
一般講演 (BP 賞対象講演)	180(89)	72(13)	252
ポストデッドラインペーパー	—	8	8
シンポジウム等	43	—	43
合 計	223	80	303

小の玉手箱」)で35件、プレナリーセッション等で8件、合計303件の講演が行われた。参加者は、事前登録345名、当日登録195名、招待講演等19名であり、実行委員を含めて562名であった。

初日のプレナリーセッションでは、応用物理学会とMOU(memorandum of understanding)を交わしているOSAとSPIEから2件の招待講演が行われた。OSAからは当初、前会長のT. Heinz教授が講演の予定であったが、直前の体調不良のために来日できず、OSA理事であるByoung Yoon Kim教授(KAIST)が急遽韓国から駆け付けて“Few-mode fiber devices and their applications”のタイトルで講演された。SPIEからは、会長のWilliam H. Arnold氏(ASML US Inc.)が“Semiconductor lithography from 1000 to 10 nm”のタイトルで講演された。基調講演は、東京大学の香取秀俊教授より「時空のゆがみを見る光格子時計」について講演が行われ、サイエンスだけでなく、夢のある応用を視野に入れた研究の紹介がなされた。

Optics & Photonics Japan ベストプレゼンテーション(OPJBP)賞については、102件のエントリーがあった。特に、今回からポスター発表もOPJBJ賞の対象になり、13件がポスター発表からのエントリーであった。多くの審査員のご協力と委員による厳正な審査の結果、4件が選定された。受賞者は、坂本盛嗣氏(北海道大学)、高橋里枝氏(埼玉大学)、橋谷田俊氏(総合研究大学院大学)、山崎洋人氏(慶應義塾大学)であった。ポスター発表によるOPJBJ賞のエントリーは次年度以降も継続する予定である。

ポスター講演および付設展示会を行ったレセプションホールは、例年に比べてスペースに余裕があり、盛況でありながら楽に移動できる適度な広さであった。展示会では企業展示13社、書籍展示1社、カタログ展示7社から出展があった。また、カンファレンスガイドには10社から広告が掲載された。

懇親会は、講演会場と同じ会場で行われ、一般97名、学生22名、招待者10名、出展企業3名の総計132名の参加があった。懇親会直前に将来問題特別説明会が開催されたこともあり、懇親会では日本光学会の将来について多くの意見交換がなされた。

OPJは日本光学会の年次講演会のため、期間中は学術講

表4 OPJ 2013 の参加者数.

	一般会員	一般非会員	学生会員	学生非会員	招待講演者等 (有料)	計
事前登録	168	9	113	55	—	345
当日登録	81	47	29	12	26	195
招待講演者等	22	—	—	—	—	22
総合計	267	56	142	67	26	562

演のほかさまざな行事が開催された。加藤聖子氏（シチズンホールディングス）と田原樹氏（関西大学）に対する日本光学会奨励賞授与式と受賞記念講演をはじめ、光設計研究グループによる光設計賞授与式と受賞記念講演3件が行われた。また、光みらい奨励金の審査委員会が開催された。今回のOPJでは、基調講演の直後に将来問題特別説明会が開催され、幹事長諮問機関である将来問題検討委員会より、委員会が考えている日本光学会の将来像について説明がなされた。

今回は、実行委員19名、齋木敏治（慶応義塾大学）プログラム委員長をはじめとするプログラム委員12名の多大なご尽力により無事開催することができた。ここに感謝の意を表したい。次回のOptics & Photonics Japan 2014は筑波大学東京キャンパス（東京都文京区）を会場として、岩井俊昭（東京農工大学）実行委員長と西澤典彦（名古屋大学）プログラム委員長のもと、2014年11月4日～7日に開催される予定となっている。ますますの充実した講演会になることを期待する。

末筆になりましたが、会員の皆様方をはじめ関係各位のご支援のお陰でOPJ 2013が無事に盛況で開催できたことに改めて感謝申し上げます。

#### 4. 2013年度研究グループ事業報告

##### (1) ナノオプティクス研究グループ (Nano Optics Group)

異分野融合による日本発の新しいナノオプティクスの潮流を生み出すことを意識し、2つのシンポジウム、「ナノフォトニクスにおける複雑性・多様性と機能」(7月17日～18日、慶應義塾大学日吉キャンパス)、「計算科学・数理物理とナノフォトニクスの新たな融合の可能性」(応用物理学会秋季講演会)を企画、開催した。また、本グループが協賛した第9回アジア環太平洋近接場光学国際会議(シンガポール)に多くの幹事が参加し、今後のアジアでの協力体制について議論した。

##### (2) コンテンポラリー・オプティクス研究グループ (Contemporary Optics Research Group)

個人の研究分野の垣根を越えて、若手からベテランにわたる幅広い層の光学に関わる研究者・技術者が交流できる場を提供することを趣旨とした「CORGサイエンスカフェ」を早稲田大学・日本女子大学合同、応用物理学会 Student Chapter との共催で行った。第1回は植田憲一氏(電気通信大学)に、第2回は堀越佳治氏(早稲田大学)、第3回は佐藤いまり氏(国立情報学研究所)に話題提供を依頼した。座談会形式にしたことで、参加者から活発な質疑が行われた後、提供していただいた話題を通じて参加者全員が参加するグループディスカッションが行われた。

##### (3) 視覚研究グループ (Vision Research Group)

2013年9月12日～13日に情報通信研究機構ユニバーサルコミュニケーション研究所において、電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会と共催で研究会を開催した。招待講演3件、一般講演9件、参加者は延べ72名であった。おもなテーマを眼球運動とした初めての研究会であったが、眼球運動に関わる広範囲な分野から発表があり、質疑応答も活発になされ、非常に盛況で有意義な研究会であった。

##### (4) 生体医用光学研究グループ (Biomedical Optics Group)

日韓の生体医用光学関連研究者の交流事業として、奈良県新公会堂で行われたOPJ 2013において、11月13日に日韓生体医用光学シンポジウム(Japan-Korea Biomedical Photonics Symposium)を企画し、日韓それぞれ4名の方に講演をお願いした。一般講演においても、グループ関係者に英語での投稿、講演を積極的に働きかけ、シンポジウム講演を午前・午後の2部構成にし、それぞれの後に関係する英語一般講演を配置するプログラム編成とした。当日は100名を超える参加者があり、盛会となった。

##### (5) 情報フォトニクス研究グループ (Group of Information Photonics)

会員数：285名。

機関誌：OPCOM NEWS 電子版2号発行。

研究会：

- ・第2回計算オプティクス研究会（2013年1月17日，埼玉大，講演7件，参加者11名，主催）
- ・第11回関西学生研究論文講演会（2013年3月6日，和歌山大，講演18件，参加者31名，主催）
- ・第7回関東学生研究論文発表会（2013年3月7日，埼玉大，講演33件，参加数58名，主催）。
- ・[IPG Week（2013年6月10日～12日）]
- ・第7回新画像システム・情報フォトニクス研究討論会（2013年6月10日，東工大，講演28件，参加者44名，主催）
- ・第1回情報フォトニクスシンポジウム（2013年6月11日，東工大，講演16件，パネルディスカッション，参加者30名，主催）
- ・第2回3DDD（3D Displays and Devices）研究会（2013年6月12日，NHK放送技術研究所，講演7件，参加者21名，主催）
- ・第3回計算オプティクス研究会（2013年6月12日，埼玉大，講演7件，参加者14名，主催）
- ・第14回情報フォトニクス研究グループ研究会（秋合宿）（2013年9月23日～25日，研修保養施設倶楽部錦溪，講演8件，ポスター25件，参加者47名，主催）
- ・第4回計算オプティクス研究会（2013年12月7日，大阪大，講演6件，参加者11名，主催）
- ・第8回関東学生研究論文発表会（2014年3月4日，電気通信大，講演39件，参加数61名，主催）
- ・第12回関西学生研究論文講演会（2014年3月10日，神戸大，講演22件，参加者46名，主催）

#### (6) 光設計研究グループ (Optics Design Group)

○国際会議

- ・ODF '14 Itabashi, Tokyo（2014年2月12日～14日，板橋区立文化会館，講演数206，参加者336名）

○研究会開催

- ・第52回研究会「収差論 / 照明と光設計一次の10年を支える光技術」(2013年7月12日，板橋区立グリーンホール，講演数7，参加者93名)
- ・第53回研究会「プロジェクション光学技術」(2013年10月18日，板橋区立グリーンホール，講演数8，参加者117名)

○第16回光設計賞実施

- ・記念講演，授与式開催（2013年11月14日，奈良新公会堂〔OPJ 2013内で実施〕）

○会誌発行

- ・会誌「OPTICS DESIGN」No. 52, 53 発行

○学会活動への委員派遣

- 光学シンポジウム実行委員，OPJプログラム委員，CP+アカデミー企画委員，「光学」編集委員

#### (7) 微小光学研究グループ (Microoptics Group)

1) 研究会の開催

- ・第128回研究会「シリコンでフォトニクス」(2013年5月14日，東京大学生産技術研究所，参加者132名 ※電子情報通信学会シリコンフォトニクス時限研究専門委員会との合同開催)
- ・第129回研究会「グリーンフォトニクスの新展開」(2013年7月24日，慶應義塾大学日吉キャンパス，参加者数55名)
- ・第130回研究会「自在な微小光学—プリンタブル，フレキシブル—」(2013年12月6日，九州大学筑紫キャンパス，参加者33名)
- ・第131回研究会「明るく照らす微小光学—照明技術の最前線—」(予定)(2014年3月5日，早稲田大学GCS研究開発センター)

2) 国際会議の開催

- ・第18回微小光学国際会議 (MOC '13) (2013年10月27日～30日，東京工業大学蔵前会館，参加者208名) ※ICO Topical Meetingとして開催

3) OPJ 2013 シンポジウムの開催

- 「チュートリアル微小の玉手箱」(2013年11月14日，奈良県新公会堂)

4) 機関誌の発行

- MICROOPTICS NEWS, Vol. 31, No. 2～No. 4
- MICROOPTICS NEWS, Vol. 32, No. 1 (予定)

5) 定期購読者数

23口

#### (8) ホログラフィックディスプレイ研究グループ (Holographic Display Artists and Engineers Club)

2013年度は，以下の研究会，講演会を開催した。

- 1) 5月31日に電気通信大学で研究会を行った。参加者は26名。
- 2) 9月6日に日本大学理工学部で研究会を行った。参加者は37名。
- 3) 10月18日に北見工業大学で研究会を行った。参加者は15名。
- 4) 12月7日にデジタルハリウッド大学で三次元映像のフォーラムと共催で講演会を行った。また，3月14日には東京農工大学にて研究会を行う予定。さらに，啓蒙活動として，11月1日～3日に，日本大学

理工学部で大学ホログラフィー展覧会を行った。現在の会員数は91名。

#### (9) 光波シンセシス研究グループ (Light-wave Synthesis Research Group)

12月11日に(独)理化学研究所において「先端光源と画像化・可視化技術の展開」と題する第20回研究会を開き、計8件の招待講演を行った。本研究会は、電子情報通信学会エレクトロニクスソサイエティ超高速光エレクトロニクス時限研究専門委員会との共同開催とした。参加者は50名を超え、活発な討論が行われた。

#### (10) 次世代フォトニックネットワークのための光技術研究グループ (Optics for Photonic Network Group)

2005年度までの活動により、本研究グループ発足の当初の目的である「光学と光通信との交流の場づくり」はほぼ軌道に乗ったとして、2006年度以降は次のフェーズに向けた展開を検討する期間と位置づけた活動を進めてきた。その結果、光通信に関係する分野が光技術の大きな牽引力のひとつとなっている状況に変わりはないといった内外の状況を鑑み、日本光学会の中に上述の関係分野との窓口としての本研究グループの活動を継続してきた。またその期間に光通信の用途が陸上・海底系にとどまらず、宇宙空間や衛星間についても叫ばれるようになり、ますます光学技術と光通信技術の協調が重要性を増してきた。積極的に上述の関係分野との交流を進める活動(2007~2010年度へのシンポジウム共催・協賛、2008年度の合宿開催などの例)に注力することを本年度以降の活動指針とし、2013年度は、これまでに達成された関連する分野の研究者の情報交換の場づくりをさらに活用していくことを試み、関連するCLEO-PR & OECC/PSといった大規模な光エレクトロニクス関連の国際会議が国内で開催される機会を活用して、新しく光通信関連において空間系の光学と密接な関連のある分野の活動との調査・連携の強化を試みた。具体的には、CLEO-PR & OECC/PSにおいても大きく取り上げられていた空間光多重通信に関するシンポジウムをOPJ 2013において企画し、開催した。

#### (11) ポリウムホログラフィックメモリ技術研究グループ (Research Group on Volume Holographic Memory Technology)

2013年度は7月11日(金)に宇都宮大学オプティクス教育研究センターにおいて研究室見学会と「アーカイブメモリと関連技術」と題した第18回技術研究会を開催した。光ストレージのクラウド展開をはじめ、フェムト秒パルスの波面形状と偏光分布を任意に制御可能な並列レーザー加工システム、ホログラフィック光相関システムの最近の進

展、およびコリニアホログラフィックメモリの記録再生理論の4件の講演をプログラムし、28名に参加いただいた。

#### (12) レーザーディスプレイ技術研究グループ (Laser Display Technology Research Group)

当研究グループは年度内に2回の技術研究会を開催した。第12回研究会「スマートレーザーディスプレイ、さらなる市場拡大に向けて!」は2013年7月10日(水)東京大学にて開催され参加者は101名、第13回研究会「スマートレーザーディスプレイ、と3D映像!」は2013年11月22日(金)神戸大学にて開催され参加者は77名であった。また、第2回レーザーディスプレイ国際会議を2013年4月23日~25日に横浜パシフィコで開催、13か国から107名の参加者があった。

#### (13) デジタルオプティクス技術研究グループ (Digital Optics Research Group)

10月に北見市で開催された International Workshop on Holography and Related Technologies 2013 (IWH 2013) および、11月に韓国テジョンで開催された The Third Korea-Japan Workshop on Digital Holography and Information Photonics (DHIP) の開催に委員、講演者として貢献した。また、11月に奈良市で開催された Optics and Photonics Japan 2013 でシンポジウムを開催した(招待講演6件)。12月には横浜市でセミナーを開催し、31名の参加者があった。参加者からのアンケートで高評価を得た。9月に幹事会を開催し、幹事体制を一新した。

#### (14) 偏光計測・制御技術研究グループ (Polarization Science and Engineering Group)

- ・5月26日(日)~31日(金)の期間、第6回国際分光エリプソメトリー会議が京都にて開催され、当研究グループのメンバーも運営委員として協力した。
- ・1月24日(金)~25日(土)の期間、沖縄で偏光計測の勉強会を行った。参加者10名(内訳は学生3名、企業4名)。1月24日(水)は沖縄科学技術大学院大学の新竹研究室とベアン・クン研究室を見学した。
- ・2月20日(木)に第9回偏光計測研究会を東京都立産業技術研究センター(東京・青海)にて開催した。参加費一般3,000円、学生300円。参加者は46名。特別講演3件、チュートリアル講演1件、企業講演6件および、東京都立産業技術研究センター内の施設見学会を行った。
- ・運営委員会を、応用物理学会(同志社大学:9月)と第9回偏光計測研究会(2月)の折に開催した。



## 5. 2014 年度研究グループ事業計画

### (1) ナノオプティクス研究グループ (Nano Optics Group)

応用物理学会秋季講演会と連動してトピカルミーティングを開催し、ブレーンストーミング的な議論を行う。冬季には、装いを新たにした研究討論会を開催する。ナノフォトニクスの新分野開拓と若手・学生の育成を主たる目的とし、ユニークなテーマ設定、若手・学生招待講演、チュートリアル等を特徴とした研究会とする。また、第10回アジア環太平洋近接場光学国際会議が2015年に日本で開催されることになり、実質的な主催団体として準備を進める。

### (2) コンテンポラリー・オプティクス研究グループ (Contemporary Optics Research Group)

多岐にわたる光学分野において、最先端の研究の基礎となる部分に重点をおき、2013年度に開催した「CORGサイエンスカフェ」をベースとして、若手研究者・技術者の参加しやすい会員相互の実質的なネットワークづくりを進めるために以下のことを計画している。

- 1) 企業あるいは大学の研究施設への見学会を兼ねた研究会を開催(見学先等詳細は未定。学会あるいは研究会との共催も予定)
- 2) 会員メーリングリストを通じての、関連する国際会議、学会、イベント等の紹介および報告

### (3) 視覚研究グループ (Vision Research Group)

2014年10月に電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会と共催により、研究会を開催予定である。昨年度の研究会は盛況であったため、今年度も引き続きおもなテーマを眼球運動とし、多くの学会にまたがる眼球運動に関連する研究を集めてレベルの高い研究会とするねらいである。発表件数は20件程度、招待講演1件程度、参加人数は40名程度、場所は京都を予定している。

### (4) 生体医用光学研究グループ (Biomedical Optics Group)

生体医用光学関連研究者の日韓交流事業については、韓国側が韓国光学会夏季大会(the Optical Society of Korea Summer Meeting 2014)において日韓シンポジウムを企画することを計画しているため、開催が決定した場合には日本からの講演者推薦などの協力を行う予定である。また、次回のAsian and Pacific Rim Symposium on Biophotonics (APBP)を日本で開催することがほぼ確定したため、国内外の調整を継続する。

### (5) 情報フォトニクス研究グループ (Group of Information Photonics)

特定のテーマについて深く議論するワーキンググループ

活動を継続し、研究会等を実施する。情報フォトニクス関連分野について深い議論を行う新画像システム・情報フォトニクス研究討論会を開催する。このほか、関西学生研究論文講演会、関東学生研究論文講演会、情報フォトニクス研究グループ研究会(秋合宿)の主催、JSAP-OSA ジョイントシンポジウム、DHIPなどの国際活動、OPJ 2014や応用物理学会講演会でのシンポジウムを予定している。また、機関誌OPCOM NEWSの発行や、メーリングリストによる情報配信を行う。

### (6) 光設計研究グループ (Optics Design Group)

- 研究会
  - ・第54~56回研究会開催
- 光設計賞
  - ・第17回光設計賞実施
- 出版
  - ・会誌「OPTICS DESIGN」No. 54~56発行

### (7) 微小光学研究グループ (Microoptics Group)

- (1) 研究会の開催
  - ・第132回研究会(テーマ:3D関連,2014年7月25日,東京大学生産技術研究所)
  - ・第133回研究会(テーマ:自動車関連,2014年10月9日,日本女子大学新泉山館)
  - ・第134回研究会(テーマ:ビッグデータ関連,2014年12月5日,東京工業大学田町キャンパス)
  - ・第135回研究会(テーマ未定,2015年3月,場所未定)
- (2) セミナーの開催
  - 第18回微小光学特別セミナー「微小光学の基礎と応用」(2014年6月3日~4日,東京大学生産技術研究所)
- (3) 国際会議の開催
  - 第19回微小光学国際会議(2014年6月24日~27日,ニース(フランス)※ECIOとのジョイントによりECIO-MOC 2014として開催)

### (4) 機関誌の発行

MICROOPTICS NEWS, Vol. 32 No. 2~No. 4, Vol. 33 No. 1

### (8) ホログラフィックディスプレイ研究グループ (Holographic Display Artists and Engineers Group)

2014年度は4回の研究会(5月,8月,11月,3月)を計画する。これらは、ホログラフィーを中心とした立体映像の講演などを予定する。特に5月には、鈴木岡田記念賞の授賞式と記念講演を予定する。また、6月に韓国仁川大学で研究会を行う予定。また、啓蒙活動として、ホログラム

講習会、大学ホログラフィー展覧会を行うとともに、各種展示会などの後援を行い、ホログラフィーの素晴らしさを広めてゆく予定である。

#### (9) 光波シンセシス研究グループ (Light-wave Synthesis Research Group)

研究会を2回程度開催する予定である。詳細な情報は、研究グループウェブサイト (<http://physics.tp.chiba-u.jp/~omatsu/lws/index.html>) にて随時アナウンスする。

#### (10) 次世代フォトニックネットワークのための光技術研究グループ (Optics for Photonic Network Group)

2013年度は、内外の国際状況の関係などにより足踏みしていた関連する分野の研究者の情報交換の場づくりと震災などの内外の状況を踏まえた光通信関連の内外の活動との連携の強化について、これまでに連携を強化してきた日本と中国の研究者間交流をアジア全体に広げる取り組みを推進する。特に、関連するMWP/APMP 2014といった国際会議が国内で開催される機会を活用して、最近光学技術と光通信技術の協調が重要性を増している分野(光インターコネクションなど含む)におけるアジアの研究者を交えた意見交換の場の提供を目的とした研究会(開催日:10月、開催場所:札幌、参加予定人数:30名程度)の企画を予定している。

#### (11) ポリウムホログラフィックメモリ技術研究グループ (Research Group on Volume Holographic Memory Technology)

本年度は5月下旬に東京大学生産技術研究所にて第19回技術研究会の開催を計画している。また、秋にはOPJ 2014の開催に合わせて第20回技術研究会を開催する予定である。ワーキング活動については、今後の進め方を検討中である。

#### (12) レーザーディスプレイ技術研究グループ (Laser Display Technology Research Group)

レーザーディスプレイ技術研究グループの本年度の活動としては、年度内に2回の技術研究会開催を予定している。また第3回国際会議(Laser Display Conference)を台湾(国立中興大学)で6月19日~20日の両日開催予定である。

〈今年度開催予定の公開技術研究会〉

- (1) 第14回レーザーディスプレイ技術研究会(2014年4月4日(金)を予定、東大生研)
- (2) 第15回レーザーディスプレイ技術研究会(2014年9月~11月を予定、場所未定)

#### (13) デジタルオプティクス研究グループ (Digital Optics Research Group)

国際的活動として、4月22日~24日に横浜にて開催されるBiomedical Imaging and Sensing Conference 2014に協力する。また、5月22日~24日に第4回研究会を石垣島で開催する。さらに、10月15日~17日開催予定のIWH 2014に協力する。11月にDHIP 2014を開催する予定である。OPJ 2014においてもシンポジウムを企画し、引き続き、国内外のデジタルオプティクスの研究者との交流を深める。ホームページや研究会を通して国内外の研究者に研究グループをPRし、会員の増加を推進する。

#### (14) 偏光計測・制御研究グループ (Polarization Science and Engineering Group)

- ・第10回偏光計測研究会「偏光と計測」を7月14日につくば市にて開催する予定。一般参加費3,000円、学生300円(予定)。
- ・OPJ 2014(11月4日~7日)でのシンポジウムを企画中。
- ・上記とは別に、地方での勉強会も開催予定。
- ・運営委員会を年2回予定。

## 6. 会 計

前予算担当会計幹事 内田 恒夫  
前収支担当会計幹事 西村久美子

2013年度決算は当期収支が1,030万円の赤字となった。HPリニューアル事業費(2013年度にて終了)400万円の積立金取り崩しや、雑誌「光学」の広告収入減(固定制から歩合制へ契約更改)の影響も考慮した2013年度予算は1,580万円の赤字予算であった。2013年度決算にて当期収支が1,030万円の赤字にとどまった要因としては、「会誌出版事業」の「光学」および「Optical Review」の出版経費削減による支出減や、HPリニューアル事業費、国際協力支援金等の支出が当初よりも少なく済んだことがあげられる。

2013年度各事業の収支は以下の通りである。「講習会・講演会事業」全体では257万円の赤字である。内訳は「光学シンポジウム」が28万円の黒字に対し、「冬期講習会」と「Optics & Photonics Japan」がそれぞれ73万円と196万円の赤字となった。「講習会・講演会事業」については、景気の影響もあり依然として参加者や出展企業の広告・展示数の低迷が続いている。2013年度も「サマーセミナー」は開催していない。

「会誌出版事業」では、「Optical Review」が164万円の赤

字で、「光学」は1,380万円の赤字である。なお、「産学官推進事業」は3万円の黒字であった。

2014年度予算は、事業活動収支で730万円の赤字を見込んでおり、予算規模は6,600万円となる。2014年度の予算策定において、「会誌出版事業」の「光学」および「Optical Review」はそれぞれ前年比20%と10%の支出削減を実施した。しかし、近年課題となっている単年度の収支赤字傾向が改善できる見込みが少なく、現在の日本光学会が支出超過状態にあることは幹事会においても十分に認識されている。そこで、2013年11月に開催された第2回常任幹事会では、応用物理学会へ提出（2013年10月）した2014年度予算に対するさらなる支出削減の取り込み案が承認された。本誌掲載の2014年度正味財産増減予算書には反映できていないが、本年度に入り各事業の収支が均衡するように予算の見直しを実施し、最終的な2014年度の事業活動収支としては730万円の赤字から480万円の赤字まで良好化する見込みである。

2014年度予算は事業活動収支の赤字減額を目指した予算策定を行っているが、ここ数年会員数は単調に減少しており、景気の影響で講習会の収入増も期待できないため、事業活動収支の赤字基調は当面続く可能性がある。過年の黒字を引当金として積み立てた特定資産積立金を含む繰越金を計画的に運用し、魅力ある学会活動を通して会員数増加の流れにつなげていく必要がある。収支の均衡と健全な学会運営のため、会員皆様のご継続的なご理解とご協力をお願いしたい。

## 7. 高野榮一光科学基金委員会活動報告

高野榮一光科学基金委員会委員長 武田 光夫

高野榮一光科学基金は、元日本光学会会員、故高野榮一氏により日本光学会に遺贈された遺産をもとに2011年に設立され、同氏のご遺志に沿って以下のような事業の支援をしている。

- (1) 光科学と光技術に関わる研究分野において優れた研究成果をあげた者の顕彰。
- (2) 光分野の将来の人材育成に資する事業。
- (3) 光分野の産学官連携の推進と拠点作りに資する事業。
- (4) 日本光学会の活動の国際化に資する事業。
- (5) 日本光学会の研究グループの研究活動の活性化支援。
- (6) 日本光学会の出版事業の強化支援。

(7) 日本光学会の主催する研究集会の内容の充実のための諸活動の助成。

(8) 上記の事業活動の実施に必要な事務経費と人件費。高野榮一光科学基金による支援を承認した2013年度の事業は以下の通りで、支援承認額の総額は522万円である。括弧内は実施主体の研究グループや組織を示す。

- ・レーザーディスプレイ国際会議 LDC 2013, 4月23日～25日（レーザーディスプレイ研究グループ）
- ・第10回光工学における日本・フィンランド合同シンポジウム OIE '13, 9月2日～5日（OIE '13実行委員会）
- ・第18回マイクロオプティクスコンファレンス MOC '13, 10月27日～30日（微小光学研究グループ）
- ・日台光科学技術交流セミナー JTBS 2013, 11月24日～27日（ナノオプティクス研究グループ）
- ・第9回光設計・製造を中心とした国際会議 ODF 2014 Itabashi Tokyo, 2月12日～14日（光設計研究グループ）
- ・第10回光設計・製造を中心とした国際会議 ODF 2016 準備のための2013年度の活動（光設計研究グループ）
- ・光設計研究グループの先進的光学設計ソフトウェアキンググループの2013年度活動支援（光設計研究グループ）
- ・Optical Review 誌の表紙デザイン刷新支援（Optical Review 出版委員会）

2014年度、2015年度についても新たな支援の計画を進めている（高野榮一光科学基金のこれまでの助成事業と、助成の申請書は日本光学会ホームページ <http://osj-jsap.jp/committee/kikin.html> を参照。受付は日本光学会事務まで）。高野榮一光科学基金とその設立の詳細については、「光学」第41巻第3号（2012年3月）を参照されたい。

## 8. 将来問題検討委員会活動報告

将来問題検討委員会委員長 伊藤 雅英

2012年度に設置された将来問題検討委員会は、2013年度も引き続き「日本光学会の将来にわたる問題」について検討を行った。同委員会は、2013年6月7日、28日、9月27日、10月26日、2014年2月23日に筑波大学東京キャンパス会議室にて開催された。公益社団法人応用物理学会における日本光学会の活動のあり方などについて検討を重ねた結果、9月30日開催の第200回幹事会において、同委

員会の審議の経過報告ならびに以下の答申を行った。「日本の光科学界と光産業界の関係を強化し、国内外の関連学会との共存・共栄関係を発展させ、かつ若手研究者と技術者を育成するためには、光学関連分野の研究者と技術者のアイデンティティを確立し、かつ強力に先導する法人格を有する新しい非営利型の『一般社団法人日本光学会』の設立が必要である。」この答申案について、審議を行い、11月12日開催のOPJ 2014において会員向けの説明会を開催することとした。10月26日筑波大学東京キャンパスにおいて研究グループ代表者会議を開催し、審議の経過と答申の説明を行い、研究グループの意見を聴取した。11月12日OPJ 2014において、会員向けの説明会を開催した。11月25日開催の第2回常任幹事会にて、OPJ 2014における

説明会の報告を行った。2014年1月27日開催の第201回幹事会（新旧合同）において2014年度幹事会幹事に審議の経過と答申の説明を行い、3月10日開催予定の常任幹事会を第202回幹事会に変更し、新法人の設立について光学会会員による投票で賛否を決することとした。3月10日開催の202回幹事会にて、答申について投票を行い、3分の2以上の賛成を得て、新方針設立に向けて光学会会員の投票を行うこととした。3月18日春季応用物理学会学術講演会にて、光学会総会と研究グループ代表者会議において、これまでの審議の総括を行い、答申の内容と第202回幹事会の投票結果、ならびに2014年度の作業計画を報告した。3月28日に応用物理学会事務局との意見交換会を開催し、2014年度の活動について議論した。

2013 年度事業報告／2014 年度事業計画

	2013 年度事業報告 (2013 年 4 月 1 日～2014 年 3 月 31 日)	2014 年度事業計画 (2014 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日)
1. 会誌の発行	「光学」 Vol. 42, No. 4 ～ Vol. 43, No. 3 (12 号)	「光学」 Vol. 43, No. 4 ～ Vol. 44, No. 3 (12 号)
2. 欧文誌の発行	「Optical Review」 Vol. 20, No. 2 ～ Vol. 21, No. 1 (6 号)	「Optical Review」 Vol. 21, No. 2 ～ Vol. 22, No. 1 (6 号)
3. 光学論文賞・日本光学会奨励賞・OPJ ベストプレゼンテーション賞・光みらい奨励金の授与	<p>光学論文賞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・佐藤琢哉(東京大学)</li> <li>・久武信太郎(大阪大学)</li> </ul> <p>日本光学会奨励賞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・田原 樹(京都工芸繊維大学)</li> <li>・加藤聖子(シチズンホールディングス)</li> </ul> <p>Optics &amp; Photonics Japan ベストプレゼンテーション賞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・山崎洋人(慶応義塾大学)</li> <li>・高橋里枝(埼玉大学)</li> <li>・坂本盛嗣(北海道大学)</li> <li>・橋谷田俊(分子科学研究所)</li> </ul> <p>光みらい若手奨励金(コニカミノルタ科学技術振興財団賞)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・若山俊隆(埼玉医科大学)</li> </ul>	<p>光学論文賞</p> <p>日本光学会奨励賞</p> <p>Optics &amp; Photonics Japan ベストプレゼンテーション賞</p> <p>光みらい奨励金(コニカミノルタ科学技術振興財団賞)</p>
4. 講演会・講習会	<p>第38回光学シンポジウム「光学システム・光学素子の設計、製作、評価を中心として」 6月27,28日 276名</p> <p>応用物理学・物理系学会中国四国支部合同学術講演会 7月27日 220名</p> <p>平成25年度電気関係学会北陸支部連合大会 9月21,22日 554名</p> <p>Optics &amp; Photonics Japan 2013 11月12-14日 562名</p> <p>第47回光学五学会関西支部連合講演会「大規模光情報の未来」 12月7日 31名</p> <p>第10回北海道地区合同学術講演会 12月9,10日 109名</p> <p>平成25年度関西講演会「干渉計測技術の実用化」 1月15日 30名</p> <p>第40回冬期講習会「光ファイバ技術の最前線」 1月16,17日 53名</p>	<p>第39回光学シンポジウム「光学システム・光学素子の設計、製作、評価を中心として」 6月26,27日</p> <p>応用物理学・物理系学会中国四国支部合同学術講演会 未定</p> <p>平成26年度電気関係学会北陸支部連合大会 未定</p> <p>Optics &amp; Photonics Japan 2014 未定</p> <p>第48回光学五学会関西支部連合講演会 未定</p> <p>第11回北海道地区合同学術講演会 未定</p> <p>平成26年度関西講演会 未定</p> <p>第41回冬期講習会 未定</p>
5. 研究グループ	ナノオプティクス, 光波シンセシス, コンテンポラリー・オプティクス, 視覚, 生体医用光学, 情報フォトニクス, 光設計, 微小光学, ホログラフィックディスプレイ, 次世代フォトニックネットワークのための光技術, ポリウムホログラフィックメモリ技術, レーザーディスプレイ技術, デジタルオプティクス, 偏光計測・制御技術	ナノオプティクス, 光波シンセシス, コンテンポラリー・オプティクス, 視覚, 生体医用光学, 情報フォトニクス, 光設計, 微小光学, ホログラフィックディスプレイ, 次世代フォトニックネットワークのための光技術, ポリウムホログラフィックメモリ技術, レーザーディスプレイ技術, デジタルオプティクス, 偏光計測・制御技術
6. 幹事会・委員会	<p>幹事会 4回</p> <p>常任幹事会 2回</p> <p>「光学」編集委員会 6回</p> <p>光科学および光技術調査委員会(関東) 3回</p> <p>光科学および光技術調査委員会(関西) 3回</p> <p>「Optical Review」編集委員会 1回</p> <p>「Optical Review」出版委員会 1回</p>	<p>幹事会 2回</p> <p>常任幹事会 4回</p> <p>「光学」編集委員会 6回</p> <p>光科学および光技術調査委員会(関東) 3回</p> <p>光科学および光技術調査委員会(関西) 3回</p> <p>「Optical Review」編集委員会 1回</p> <p>「Optical Review」出版委員会 1回</p>
7. 会員数	<p>2013年12月末日現在 (( )内は昨年度)</p> <p>A 会員 617名(677名)</p> <p>B 会員 778名(823名)</p> <p>特別会員 112口 [A:70口, B:12口, C:30口] (117口)</p> <p>賛助会員 62社89口(63社90口)</p>	

## 2013 年度収支決算報告書

### (収入の部)

2013 年 1 月 1 日～12 月 31 日

大 科 目	中 科 目	予 算	決 算	内 容 (金額記入)
事務局運営費収入		17,784,400	17,519,550	
	会 費 収 入	17,784,400	17,258,750	
	そ の 他 収 入	0	260,800	幹事会懇親会費収入, 広告収入, 資料コピー代
事 業 収 入		30,944,000	28,177,113	
	講習会, 講演会収入	10,150,000	7,906,511	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 266,050/ Optics & Photonics Japan 6,073,568/ 支部その他 23,643/ 光学シンポジウム 1,543,250/
	会誌出版事業収入「光 学」	3,280,000	2,521,844	別刷代収入 412,545/ 広告料収入 2,085,299/ 懇親会費 24,000/
	会誌出版事業収入「Optical Review」	8,300,000	7,391,432	別刷代投稿 5,977,000/ 購読料 1,199,432/ 国際協力支援金 215,000/
	研究グループ事業	8,714,000	9,857,326	参加費収入(会費) 6,103,080/ 予稿集収入 669,000/ 協賛金収入 0/0/ 受取寄付金収入 0/ 雑収入(バックナンバー等) 435,246/ 展示会収入 10,000/ 光学研究G補助金収入(日本光学会から) 2,640,000/
	産官学推進事業	500,000	500,000	
雑 収 入		340,000	126,860	
	受 取 利 息	0	6,945	
	雑 収 入	340,000	119,915	受取利息 2,315/ バックナンバー売上 117,600/
引 当 金 戻 入		0	0	
	貸倒引当金戻入	0	0	
繰 入 金 収 入		8,987,000	6,899,950	
	分科会賛助会費還元金	3,536,000	3,064,000	
	分科会給与補助	5,451,000	3,835,950	学会担当者給分与応物から繰り入れ
当期収入合計		58,055,400	52,723,473	
前期繰越収支差額		74,000,000	70,204,158	事業活動繰越金 27,153,965/ 特定資産積立 43,000,000/ 固定資産期首残高 50,193/
収 入 合 計		132,055,400	122,927,631	

### (支出の部)

大 科 目	中 科 目	予 算	決 算	内 容 (金額記入)
講習会, 講演会事業費		10,925,000	10,478,717	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 1,005,035/ Optics & Photonics Japan 8,035,896/ その他 支部 178,736/ 光学シンポジウム 1,259,050/ 国際会議 0/
	臨時雇賃金	520,000	540,900	臨時雇賃金 0/0/522,900/0/18,000/0
	印刷製本費	1,870,000	1,706,832	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 265,250/ Optics & Photonics Japan 1,035,231/ その他 支部 0/ 光学シンポジウム 406,351/ 国際会議 0/
	諸 経 費	8,535,000	8,230,985	業務委託費 0/0/2,379,206/0/0/ 旅費交通費 0/49,110/515,340/0/5,360/0/ 賃借料 0/ 173,900/2,624,100/6,440/200,000/0/ 通信運搬費 0/11,320/71,836/0/52,070/0/ 懇親会費 0/ 39,060/536,139/0/382,340/0/ 会議費 0/740/137,300/0/64,766/0, 消耗品費 0/0/90,214/ 3,080/20,569/0/ 諸謝金 0/460,405/22,274/69,048/87,490/0/ 雑費 支払手数料 0/5,250/ 101,356/20,168/22,104/0/ 共催会合負担金 0/0/0/80,000/0/0/ 補助金支出 0/0/0/0/0/
会誌出版事業「光 学」		21,475,000	16,291,974	
	印刷製本費	10,490,000	6,465,497	組版代 2,181,060/ 製版代 674,730/ 刷版代 487,410/ 印刷代 1,109,850/ 製本代 395,010/ 別刷印刷代 156,757/ 用紙代 1,460,680/ 一般印刷製本費 0/
	郵 送 費	2,500,000	1,833,978	
	諸 経 費	8,485,000	7,992,499	業務委託費 5,670,000/ データベース作成 0/ 編集委旅費交通費 1,673,640/ 通信運搬費 130,567/ 賃借料 13,600/ 会議費 86,398/ 消耗品費 0/ 諸謝金 0/ 雑費 250,845/ 懇親会 167,449/
会誌出版事業「Optical Review」		10,535,000	9,029,420	
	印刷製本費	4,600,000	4,635,934	組版代 1,519,875/ 製版代 376,477/ 刷版代 361,200/ 印刷代 1,270,500/ 製本代 366,282/ 別刷印刷代 100,684/ 用紙代 640,916/ 一般印刷製本費 0/ その他印刷費 0/
	郵 送 費	1,400,000	1,082,822	
	諸 経 費	4,535,000	3,310,664	業務委託費 2,278,000/ 英文校閲料 672,000/ 旅費交通費 53,000/ 通信運搬費 20,790/ 賃借料 115,920/ 会議費 25,388/ 支払リース料 0/ 貸倒引当金繰入 0/ 別刷投稿料補助 0/ 雑費 145,566/ 懇親会 0/
産官学推進事業		500,000	468,489	
	印刷製本費	0	0	
	諸 経 費	500,000	468,489	臨時雇賃金 0/ 旅費交通費 32,480/ 賃借料 0/ 通信運搬費 0/ 懇親会費 0/ 奨励金支出 400,000/ 会議費 24,150/ 消耗品費 3,024/ 諸謝金 0/ 雑費 8,835/
研究グループ事業		9,114,100	9,077,716	
	印刷製本費	1,793,000	1,740,153	
	諸 経 費	7,321,100	7,337,563	臨時雇賃金 1,033,555/ 会議費 1,827,559/ 旅費交通費 1,815,010/ 通信運搬費 158,220/ 消耗品費 87,518/ 賃借料(会場費) 1,076,311/ 諸謝金(税込) 703,241/ 支払寄付金 0/ 諸経費 636,149/
国際協力支援金		1,100,000	50,000	
	旅 費 交 通 費	0	0	
	諸 経 費	1,100,000	50,000	国際協力支援金 0/ 諸謝金 0/ 会議費 0/ 他会計支出費用 50,000/ 雑費 0/ (予算では分科会運営費として計上)
表彰事業		500,000	332,779	
事務局運営費(含 幹事会)		17,474,000	15,172,568	
	給 与 手 当	5,451,000	3,835,950	学会担当者負担
	一般印刷製本費	75,000	126,709	諸印刷代, 資料コピー代
	賃 借 料	1,410,000	1,630,014	応物会議室使用料, レンタルサーバー代
	諸 経 費	9,820,000	9,179,895	業務委託費 5,755,693/ 電子版作成運営費 0/ 旅費交通費 2,562,620/ 通信運搬費 86,555/ 電話料 47,792/ 会議費 126,694/ 懇親会 163,191/ 清掃光熱水料費 0/ 消耗品費 264,517/ 運用保守費 0/ 雑費 115,503/ 租税公課 0/ 振替手数料 57,330/ 什器備品購入支出 0/ 活動支援金受入支出 0/
	助成金支出	500,000	400,000	研究グループ助成金
	貸倒引当金	218,000	0	未納会費
繰入金支出		2,316,000	2,130,981	(他会計への支出額)
	学会事務費	2,316,000	2,130,981	事務手数料
予 備 費		0	0	
当期支出合計		73,939,100	63,032,644	
当期収支差額		-15,883,700	-10,309,171	
次期繰越収支差額		58,116,300	59,894,987	事業活動繰越金 22,844,797/ 特定資産積立 37,000,000/ 固定資産期末残高 50,190/
支 出 合 計		132,055,400	122,927,631	

2014 年度正味財産増減予算書

2014 年 1 月 1 日～12 月 31 日

(収入の部)			
大 科 目	中 科 目	予 算	内 容 (金額記入)
事務局運営費収入		16,840,000	
	会 費 収 入	16,840,000	
	そ の 他 収 入	0	Web 広告, 懇親会費
事 業 収 入		33,616,000	
	講習会, 講演会収入	9,585,000	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 1,122,000/ Optics & Photonics Japan 7,083,000/ その他 0/ 光学シンポジウム 1,380,000/ 国際会議 0/
	会誌出版事業収入「光 学」	4,030,000	別刷代收り 1,000,000/ 広告料収入 3,000,000/ 懇親会費 30,000/
	会誌出版事業収入「Optical Review」	8,700,000	別刷投稿 7,000,000/ 雑収入 0/
	研究グループ事業	10,801,000	参加費収入(会費) 7,250,000/ 予稿集収入 775,000/ 協賛金収入 240,000/ 受取補助金収入 0/ 受取寄付金収入 0/ 雑収入(バックナンバー等) 986,000/ 光学研究G補助金収入(日本光学会から) 1,550,000/ 講習・研究会 0/ 奨励金 500,000/
	産官学推進事業収入	500,000	
雑 収 入		340,000	
	受 取 利 息	0	
	雑 収 入	340,000	バックナンバー, 資料コピー代
引 当 金 戻 入		0	
	貸倒引当金戻入	0	
繰 入 金 収 入		8,367,000	
	分会会費助会費還元金	3,064,000	
	分会会給与補助	5,303,000	学会担当者分給与応物から繰り入れ
事業活動収入合計		59,163,000	
引当金取崩収入		0	
当期収入合計		59,163,000	
前期繰越収支差額		59,605,000	
収 入 合 計		118,768,000	

(支出の部)			
大 科 目	中 科 目	予 算	内 容 (金額記入)
講習会, 講演会事業費		10,595,000	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 1,122,000/ Optics & Photonics Japan 7,873,000/ その他 240,000/ 光学シンポジウム 1,360,000/
	臨 時 雇 賃 金	540,000	臨時雇賃金 0/20,000/500,000/0/20,000/
	印 刷 製 本 費	1,480,000	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 330,000/ Optics & Photonics Japan 730,000/ その他 0/ 光学シンポジウム 420,000/
	諸 経 費	8,575,000	業務委託費 0/0/2,400,000/0/0/ 旅費交通費 0/200,000/200,000/0/40,000/ 賃借料 0/152,000/2,553,000/5,000/190,000/ 通信運搬費 0/30,000/200,000/0/60,000/ 懇親会費 0/100,000/500,000/0/280,000/ 会議費 0/10,000/450,000/0/160,000/ 消耗品費 0/5,000/50,000/0/20,000/ 諸謝金 0/270,000/40,000/135,000/150,000/ 雑費 0/5,000/250,000/0/20,000/ 共催会合負担金 0/0/0/100,000/0/ 支援金支出 0/0/0/0/0/
会誌出版事業「光 学」		16,965,000	
	印 刷 製 本 費	7,500,000	
	郵 送 費	2,000,000	
	諸 経 費	7,465,000	業務委託費 5,430,000/ データベース作成 75,000/ 編集委旅費交通費 1,500,000/ 通信運搬費 150,000/ 賃借料 120,000/ 会議費 50,000/ 消耗品費 0/ 臨時雇賃金 0/ 雑費 20,000/ 懇親会 120,000/
会誌出版事業「Optical Review」		9,529,000	
	印 刷 製 本 費	4,100,000	
	郵 送 費	1,400,000	
	諸 経 費	4,029,000	業務委託費 2,278,000/ 英文校閲料 1,000,000/ 旅費交通費 50,000/ 通信運搬費 20,000/ 賃借料 241,000/ 会議費 30,000/ 電子化費用 0/ 回収不能引当繰入 0/ 別刷投稿料補助 200,000/ 雑費 160,000/ 懇親会 50,000/
産官学推進事業		550,000	
	印 刷 製 本 費	0	
	諸 経 費	550,000	臨時雇賃金 0/ 旅費交通費 50,000/ 賃借料 0/ 通信運搬費 60,000/ 懇親会費 0/ 会議費 40,000/ 消耗品費 0/ 諸謝金 400,000/ レンタルサーバー 0/ 奨励金支出 0/ 雑費 0/
研究グループ事業		10,031,000	
	印 刷 製 本 費	1,768,000	
	諸 経 費	8,263,000	臨時雇賃金 1,236,000/ 旅費交通費 1,098,000/ 会議費・懇親会費 2,612,000/ 通信運搬費 186,000/ 賃借料 883,000/ 消耗品費 96,000/ 諸謝金 1,356,000/ 業務委託費 400,000/ 雑費 46,000/ 支援金 350,000/
国際協力支援金		1,100,000	
	旅 費 交 通 費	0	
	諸 経 費	1,100,000	国際協力支援金 600,000/ 諸謝金 500,000/ 会議費 0/ 印刷製本費 0/ 旅費交通費 300,000/ 諸謝金 40,000/ 通信運搬費 40,000/ 会議費 20,000/ 雑費 100,000/
表彰事業		500,000	
事務局運営費(含幹事会)		15,150,000	
	給 与 手 当	5,303,000	学会担当者負担
	一 般 印 刷 製 本 費	75,000	諸印刷代, 資料コピー代
	賃 借 料	1,410,000	光学資料室
	諸 経 費	5,940,000	業務委託費 3,020,000/ ホームページ費 0/ 旅費交通費 1,900,000/ 臨時雇賃金 100,000/ 諸謝金 0/ 通信運搬費 200,000/ 電話料 0/ 会議費 200,000/ 懇親会 120,000/ 清掃光熱水料費 0/ 消耗品費 200,000/ 雑費 100,000/ 租税公課 0/ 振替手数料 100,000/ 什器備品購入支出 0/ 活動支援金受入支出 0/
	助 成 金 支 出	1,550,000	研究グループ補助金
	貸 倒 引 当 金	872,000	未納会費
繰 入 金 支 出		2,044,000	(他会計への支出額)
	学 会 事 務 費	2,044,000	事務手数料
予 備 費		0	
事業活動支出合計		66,464,000	
事業活動収支差額		-7,301,000	
当期支出合計		66,464,100	
当期収支差額		-7,301,000	
次期繰越収支差額		52,304,000	